

多様性を育むユニバーサルな日本語を創る。

「やさしい日本語」の、その先へ。
多様な人々が共に生きる社会の言語環境を創る。

日本に住む外国人（海外出身者）が増加を続ける中、「やさしい日本語」が推奨されています。しかし、“特定の人のために日本語をやさしく言い換えよう”とバリアフリーを目指すことには、懸念があります。本研究では「やさしい日本語」を超え、日本語をユニバーサルデザイン化することを目指します。言葉の言い換えではなく、日本語の本質的な理解に基づいて言葉の壁を低くする、新しいコミュニケーションの在り方の提案です。

研究代表者

本田明子

HONDA Akiko



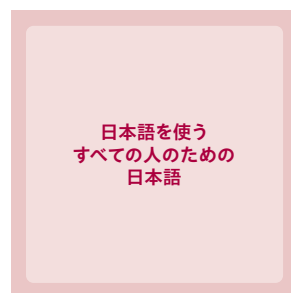
立命館アジア太平洋大学
言語教育センター 教授

「多様な人々が共に生きていくこれからの社会には、誰にでも分かりやすく使いやすい日本語が必要です」

新規性・独自性

“海外出身者のため”ではなく“すべての人のため”を目指す、本質的な日本語研究。

「やさしい日本語」は現在、海外出身者とのコミュニケーション手段として認知されていますが、本研究ではその枠組みに問題があると考えています。「海外出身者のための日本語」という枠は、かえって人々を分断し、コミュニケーションを阻害する可能性があるからです。また、定型的な言い換えルールだけでは多様な状況に対応できません。重要なのは日本語の構造を客観的に理解し、状況に応じて調整できる能力です。多様な人が共に生きる社会ではこの視点が欠かせません。日本語の構造を意識的に理解することで、相手や状況に応じた言葉を選び、調整する力が育ちます。それは、日本語学習者や子ども、高齢者など多様な立場の人とのコミュニケーションに生かれます。本研究の背景には研究代表者の多角的な経験があります。これまで、国語教育と日本語教育の両方に携わり、社会人向けの「やさしい日本語」の研修なども通じて本質的な課題を認識するに至りました。本研究は「海外出身者のため」という枠組みを超え、すべての人にとって使いやすいユニバーサルデザインの日本語環境の構築を目指します。

バリアフリーの
日本語ユニバーサルデザインの
日本語

「やさしい日本語」を“〇〇のための”ことばの言い換えマニュアルにしてしまうと、個々の「ことばの障がい」が生じた後に対応することしかできなくなる。海外出身者や子ども、高齢者、障がい者など多様な人々が共に生きる社会では、誰もが使いやすいユニバーサルデザインの日本語の環境を創ることが求められる。

社会連携に向けて

企業・自治体・教育機関との協働で、実践と研究を進め、新しい日本語環境の構築へ。

本研究は、企業・自治体・教育機関などと連携しながら、日本語環境の向上を目指して実践と研究を進めています。

企業との協働では、海外出身の人材との円滑なコミュニケーションを支援し、社内共通語としての伝わりやすい日本語の確立などを通して、多様な人材が活躍できる職場づくりに貢献できると考えています。

行政・自治体との連携では、地域の日本語教

室の質的向上や日本語学習支援者の育成に携わっており、今後、多文化共生施策にも実践的な知見を提供したいと考えています。

教育機関との連携では、日本語支援を必要とする児童・生徒への支援に取り組んでいます。この取り組みを広げながら、教育現場での言語環境の改善を目指していきます。

本研究ではこうして理論と実践を往還しながら新たな日本語環境の構築を進めていきます。



日本語学習者向けだけでなく、日本語学習支援者向けなど、さまざまな研修・勉強会を開催している。写真は、大学外の日本語学習者向け教室。

